

- 新刊紹介
1. 遣隋使がみた風景——東アジアからの新視点—— 氣賀澤保規編
2. 律令制研究入門 (歴史学叢書) 大津 透編
3. 後白河院——王の歌—— 五味文彦著
4. 草と木が語る日本の中世 盛本昌広著
5. 大坂両替店「聞書」 1 寛延四年～文化四年 (三井文庫史料叢書) 三井文庫編
6. 日本帝国と委任統治 ——南洋群島をめぐる国際政治 1914-1947—— 等松春夫著
7. 占いと中国古代の社会——発掘された古文書が語る—— (東方選書 42) 工藤元男著
8. 近代中国の地域像 (慶應義塾大学東アジア研究所叢書) 山本英史編
9. アルジェリアの歴史 ——フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化—— (世界歴史叢書) バンジャマン・ストラ著/小山田紀子・渡辺 司訳
10. 英米法律語辞典 小山貞夫編著

氣賀澤保規編

『遣隋使がみた風景』

——東アジアからの新視点——

八木書店 二〇二・二二刊
A5 四四三頁 三八〇〇円

本書は、二〇〇七年に開催された遣隋使一四〇〇年記念学術シンポジウム「東アジア史上の遣隋使」の参加者を中心にその研究成果をまとめたものである。序章にて氣賀澤保規氏が、遣隋使の派遣された隋という時代の概観、そして遣隋使研究の課題を浮き彫りにされたのに続き、内容別に三部に分かれた全十一編が収載されている。

第一部は、東アジア外交上の遣隋使の存在に注目している。1 氣賀澤保規「隋書」倭国伝からみた遣隋使」は、開皇二〇年(六〇〇)を第一回の遣隋使派遣の年とし、その経緯値が以降の倭の内政や対隋交渉の手法に生かされたと見る。2 金子修一「東アジアの国際関係と遣隋使」は、隋の対外政策の動静及び歴代の正史外国伝の記述から、倭を含めた東アジア諸国と隋との関係性の重要性を指摘する。3 田中俊明「朝鮮

新刊紹介

1. 遣隋使がみた風景——東アジアからの新視点—— 氣賀澤保規編
2. 律令制研究入門 (歴史学叢書) 大津 透編
3. 後白河院——王の歌—— 五味文彦著
4. 草と木が語る日本の中世 盛本昌広著
5. 大坂両替店「聞書」 1 寛延四年～文化四年 (三井文庫史料叢書) 三井文庫編
6. 日本帝国と委任統治 ——南洋群島をめぐる国際政治 1914-1947—— 等松春夫著
7. 占いと中国古代の社会——発掘された古文書が語る—— (東方選書 42) 工藤元男著
8. 近代中国の地域像 (慶應義塾大学東アジア研究所叢書) 山本英史編
9. アルジェリアの歴史 ——フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化—— (世界歴史叢書) バンジャマン・ストラ著/小山田紀子・渡辺 司訳
10. 英米法律語辞典 小山貞夫編著

からみた遣隋使」は、高句麗・百濟・新羅の三国各々が、統一王朝隋をして倭を交えた新たな交流ないし対立関係を築く様態を、遣使の動向を通して論じる。4 氣賀澤保規「アジア交流史からみた遣隋使」楊帝の二度の国際フェスティバルの狭間で」は遣隋使來訪と隋の外交拡大期の関係を説く。

第二部では、遣隋使を通して見える当時の時代背景を追う。1 吉村武彦「推古朝と遣隋使」は、推古朝に仏教興隆と内政の充実が図られる中で、遣隋使が担った役割について論じる。2 川本芳昭「遣隋使の国書」は、『日本書紀』中の遣隋使及び国書に関わる記述内容から、隋に対して倭が謙歩と自己主張をせんとしていたと見る。3 林部均「遣隋使と飛鳥の諸宮」は、遣隋使による中国の王宮情報の手と、倭における中国式の王宮整備との間のタイムラグを明らかにする。4 河内春人「遣隋使の「致書」国書と仏教」は、朝鮮半島から伝わったと考えられる仏教的思想が、遣隋使の国書の典拠という政治技術として活用されたことを指摘する。

第三部は倭人と隋人が見聞した風景につ

新刊紹介

いて触れる。1 氣賀澤保規「倭人がみた隋の風景」が、遣隋使の道程を辿ることで彼らが体感したであろう隋という異国風土を描く。一方、2 鐘江宏之「隋人がみた倭の風景」は、遣隋使の派遣を通じて隋人が知り得たであろう倭人の生活や社会風俗を、『隋書』の記述を中心に叙述する。また3 池田温「遣隋使のもたらした文物」は倭に将来された文物として、隋を経して隋代書籍について考察する。

本書の特徴として、遣隋使について日本の史的関心にとらわれない、中国史や朝鮮史をもクロスオーバーさせた視点を設定したことに加え、それに関する豊富な資料が付載されているという点がある。遣隋使に対する多種多様な視点、そして情報が一堂に会した本書の刊行は、遣隋使そして古代東アジア史の研究を深める上で重要な意義を持つと言えよう。

(永井瑞枝)

大津 透編

『律令制研究入門』

(歴史学叢書)

名著刊行会 二〇一・一二刊
B6 三〇八頁 三〇〇〇円

本書は、池田温氏を中心に活動する律令制研究会の参加者・報告者によって執筆された律令制研究の入門書である。

第一部「律令制の意義」は、東方学会発行の英文紀要 *Acta Asiatica* 第九九号の特集「律令制の比較研究」に掲載された論文の日本語版であり、執筆者が自身の研究蓄積を基礎に研究を概観したものである。榎本淳一「東アジア世界」における日本律令制」は東アジアとの関わりの中で、日本の律令制が如何にして受容・形成されたかを考察したもの。冊封関係と律令制継受との関連を論じ、軍国体制形成のための律令法典の編纂であったことを強調する。坂上康俊「日唐律令官僚制の比較研究」は、中央官制における官僚制比較研究の萌芽・基盤整備から、太政官と三省、天皇と皇帝などの具体的な比較研究へと進展する流れ